



本当のことを言うべきなのか。

カマオは迷っていた。本当は迷うべきではない。本当の事なんかしゃべらなくていい。それが本音だ。しかし、カマオはこのまま霧子と付き合うことはできないと感じていた。もちろん、霧子はカマオが宇宙人だとは思っていない。それはそうだろう。簡単にぼれるようならば、カマオが地球に派遣されることはなかった。

カマオはカマキリ星人だった。故郷のカマキリ星は、人口爆発と食糧不足、核戦争と環境破壊、温暖化と海水の上昇による陸地の減少などにより、自分の星に住めなくなっていた。そのため、新たな移住地を求めて、カマオと同様の先鋭隊が、地球を始め、全宇宙へと移住のための調査に出掛けたのだった。調査先の環境が不明なため、その環境に適応するよう、派遣前の訓練は熾烈なものだった。だが、カマオはそれを無事にクリアして、地球に派遣されたのだった。

地球には地球人が住んでいた。カマキリ星人は、地球人などから地球を乗っ取ろうとは考えていなかった。自分たちの星が住めなくなったのも、同種族の戦争などが原因であったからだ。できるだけ、穏便に、地球人が気付かないうちに、共存したいと考えていた。もう、争いはごめんだ。それが、カマオを始めとする、カマキリ星人の偽らざる気持ちだった。

地球は、カマオにとってとても住みやすい星だった。しかも、自分たちの祖先と思われる、同形だが体は小さい、地球人がカマキリと呼んでいる、昆虫が地球で生息していたからだ。祖先と思われるカマキリが未だに生き残っているからには、カマキリ星人も住めない場所ではないということだ。いいや、もっと積極的に住める場所だ、生活したい場所なのだ。

カマオはその情報を速やかにカマキリ星に送った。カマキリ星では、カマオを始めとする、様々な特派員から、星の状況について情報を収集して、分析していた。現在のところは、地球が、カマキリ星人にとって、もっとも住みやすい星のように推測できた。

だが、一族が移住する以上、絶滅するようなことが万に一つもあってはいけない。情報はできるだけ多い方がよい。それを再度、検討し判断すべきだ、というのが上層部の考えだった。その考えにカマオも従った。

確かに、自分が見るところでは、地球は住みやすい場所で、自分ならこの場所で永住したいと考えていた。だが、カマキリ星人みんながそう思うかどうかはわからない。他にもっとよい星があるかもしれない。他の星と比較しようがないから、カマオは上層部の判断に任せることにした。

そんな中で、カマオはある女性に恋をした。それは地球人の女性だった。名前は霧子と言った。カマオにとっては初恋なので、何が恋なのかは分からないが、いつも霧子のことが気になり、そのくせ、霧子と一緒にいると何もしゃべれなくなるのだった。その自分の気持ちや行動を地球人の行動に当てはめると、恋ということだった。

もちろん、カマキリ星人にも恋という感情はある。だが、カマキリ星人にとって、恋とは命がけだった。いや、命がけというよりも、命を失うことだった。男カマキリ星人は女カマキリ星人に喰われることによって恋が成就するのだった。そう。男のカマキリ星人にとっては、恋は一回限りのものなのだ。そうして自らの体を女カマキリ星人に喰われることによって、自らのDNAを次の世代へと引き継ぐことができるのだった。つまり、初恋＝初死＝初生。全てが初体験で、かつ全てが最終体験になった。

当然、自らの身を挺してまではDNAを次の世代へと引き継ぎたくないと思っているカマキリ星人もいる。そんなカマキリ星人は、独身のまま、一生を過ごす。だが、ほとんどの男カマキリ星人は、恋という衝動の元に、女カマキリに自らの身を委ねるのであった。抑えがたき情動。恐るべき情動。捨身飼蠅螂。四字熟語から一字余りの、誤字ではなく、五字熟語。それだけカマキリ一族の熱情は激しいものだった。

カマオは思う。自分を食べて欲しいという恋を霧子に受け入れてもらえるのだろうか。霧子に好き嫌いはないだろうか。それが心配だった。だから、カマオは霧子と付き合うようになると、デートでは、寿司などの和食に始まり、マーボー豆腐などの中華、フランスパンのフランス料理など、様々な店に行き、霧子の好みを伺った。幸い、霧子が出されるものを残すことなく全て平らげた。いや、大食い選手権に参加しているかのように完食した。

ある晩、カマオは霧子をステーキ専門店で誘った。その店の特徴は、ステーキだけ、肉だけを食べられることだった。もちろん、前菜のサラダやライスやパンのほか、食後のデザート、コーヒーを頼むことできる。でも、本当に肉の美味しさを分かるのは、肉そのものだ。後は、飾りにしか過ぎない。いや、余計なものだ。肉の味を誤魔化す不純物だ。肉のみを食す。それが、店の方針だった。

カマオは何故かしら、その方針に感動した。心の内から感激した。それこそ内なる情動に突き動かされるかのようにそのステーキ専門店を予約したのだった。だから、カマオは300グラムの肉だけを注文したかった。赤身の肉を。それも、赤い血がしたたるレアな肉を。

「それでいい？」

カマオは霧子の横顔を見た。二人はカウンターに座っていた。

「ええ。あたしも肉だけがいいわ」

霧子は大きく頷いた。

思ってもいない返事だった。女の子なんて、女子なんて、見た目だけが大切な生き物だと思っていた。化粧して、着飾って、本質を隠すことが美德だと信じている生き物だと思っていた。本質だけを愛する女がいるなんて思ってもいなかった。そんな女がいた。それも目の前にいた。それが霧子だった。

カマオは店員に注文する。

「肉だけ300グラムを二人分」

肉が調理される間、カマオは肉の食べ方の蘊蓄を口の端によだれが溜まるくらいにしゃべり続けた。カマオの話聞きながらも、霧子は獲物を見つけた時のようにカマオの顔をじっと見つめていた。

ステーキが運ばれてきた。そのステーキは、うま味を天国にまで伝えるかのように、湯気が立っている。茶褐色に変色したタンパク質の隙間から、生命をつなぐ赤い液体が生をあきらめたかのように流れていた。血だ。レアだ。こんな肉に出会ったことはない。息を飲む。匂いを吸い込む。それだけで至福の時だ。しばらくの間、カマオは自分の世界に浸っていた。

「食べないの？」

霧子の声に、カマオは我に返った。フォークとナイフを持つと果敢に肉の塊に挑んだ。切り刻まれる肉塊。フォークとナイフに血が滴る。

不思議だ。いや、おかしい。こんなにも多くの血がフォークやナイフに溢れるなんて。その血は指、手のひら、二の腕、肩、顔からとめどなく流れてきていた。それは自分の血だった。誰かがカマオの頭に噛み付いていたのだ。上目遣いに見る。それは隣に座っていたはずの霧子だった。

ああ。食べられる。霧子は自分の気持ちを知っていたのだ。花本当のことを言わなくても、本当のことを知っていたのだ。この日のために自分は生まれてきて、未来へと生きられるのだ。念願がかなう瞬間。最高の歓喜が最後の自分となる。だからこそ、最高の歓喜となるのだ。グキ。

「美味しかった」

霧子の声がカマオの失われつつある意識にかすかに聞こえた。

「また、恋をしなくっちゃ」

そこには自分と同じ姿のカマキリ星人が寄り添っていた。

「ああ」

カマオは、この瞬間、自分の使命を思い出した。カマキリ星に連絡しないと。この地球には、既にカマキリ星人が住んでいると。だから、移住には最適の地だと。

時計のチャイムが聞こえる。

「時間です」

女の声がした。

目を開けると、所在なさげに人差し指を空中に浮遊させている白いドレスを着たシンデレラの姿があった。シンデレラは心配そうな顔でカマオの顔を見つめていた。